

第29回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：優秀賞（高学年の部）

タイトル：役に立つ人に

氏名：樋田 倫生（ツチダ リオ）

小学校名：沖縄県 西原町立坂田小学校 六年

私がイメージするおまわりさんは、怖そうで、強そうな人たちだ。そして、刑事ドラマでよく見る拳銃や警棒を持っている人たちで、自分が悪いことはしていないのに、交番の前を通ると知らず知らずのうちに早足になっている。

昨年の夏休み、交番を通ると一年生の時に信号のわたり方を教えてくれたおまわりさんと偶然、出会った。信号のわたり方をていねいに教えてくれたおまわりさんだ。

「なら、優しいのかな」

一瞬、頭をよぎった。

「いやいや。拳銃を持っている人が優しいわけない。」

でも、そんな印象が変わったのは春先、アメリカ人らしき人に道をきかれたときだった。私は、質問されているのだけれど、英語で何を言っているのか、さっぱりわからなかった。近くに坂田交番があったので、そこで一緒に道をたずねることにした。到着すると坂田交番にいるおまわりさんが何やら会話をしているようだった。英語を話せない私でも、おまわりさんが、ていねいに質問に答えていることがわかった。

アメリカ人が行った後に

「すごいなあ。」

と私はつぶやいた。おまわりさんは、

「ありがとう。早く帰らなくてもいいの。」

と言った。たしかに、早く帰らなければいけないけれど、どうしても聞きたい質問できてしまった。それは、命の危険がある「おまわりさん」になぜなったのかが知りたくなったのだ。その後、警察官の答えを聞いてびっくりした。それは、

「人の役に立ちたい」

という思いと

「小さい頃に警察官に優しくしてもらったから。」

の2つだった。このおまわりさんは、小さい頃に迷子になってしまったらしい。でも、その時におまわりさんが、

「大丈夫。お母さんが待っているよ。」

と言って、泣いていた子どもの頃のおまわりさんを家まで送り届けてくれたそう。その時に、おまわりさんになると決めたとのことだった。幼いころから自分を決めていること

に私はとてもすごいと感じた。

いつも、落とし物の持ち主を探したり、困っている人の話を聞いたりしているおまわりさんが、私たちの生活を支えていることに気づき、何だかうれしくなった。また、アメリカ人も日本人も区別なく接しているおまわりさんがいることに誇らしく思えた。

あのおまわりさんにあった日から、交番の前を通ったり、おまわりさんに会ったら、私の心は何だか少し、温かくなっている。今、私は「人の役に立てる仕事」につきたいと、強く思っている。